

タイムベースドメディア・プロジェクト2021年度活動報告書

担当：三輪眞弘（代表） 前田真二郎 松井茂

履修学生：稲吉宏紀 イム・ヒョンムック 樋口聡一郎 宮崎那奈子（林暢彦）（西尾秋乃）

研究概要

蓄音機や写真、映画の発明以来、人類は「装置を用いた表現」の可能性を様々な形で広げ、「いま、ここに」存在しない出来事を（擬似）体験することが日常のこととなった。特に映像や音響を含むあらゆる「表現」がデジタル化され、それらを次々と統合していくネットワーク上の「新しい時空間」の出現はまさに私たちにとって「第二の現実」としての存在感を獲得している。

このような状況の中で、かつて「芸術」と呼ばれていたものは、私たちにとっていま、どのような意味を持つものなのか？このプロジェクトでは特に時間-内芸術、すなわち時間的経過の中で行われる様々な「表現」に注目し、「装置を用いた表現」と伝統的な芸能の習得/実践双方を通して、この問題に取り組む。それは「機械」と私たちの身体との関係をめぐる探求であり、さらにメディアと人間存在との関係性を問うことでもある。



2021年度の研究活動

4年目を迎えるタイムベースドメディア（TBM）プロジェクトでは、毎週行われるミーティングを中心に、通年の活動と学内外の発表など期間の限られた計画の両方を通して研究を行い、また、学生の作品制作などもこのプロジェクトの実践として位置づけた。様々な『時間内-芸術』を参照しながら、メディアパフォーマンス作品を制作する一方、ネットワーク上の「新しい時空間」における表現の可能性として、ネットストーリーミングによる「配信/中継」を試みた。また、外部発表については、これらの制作を通してプロジェクト研究発表会の他、学会や外部企画との連携を意識しながら積極的に進めた。

また、延期されていた、三輪眞弘個人のこれまでの業績と『ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 - 清められた夜 -』それぞれに対する第52回サントリー音楽賞と第20回佐治敬三賞の贈賞式がサントリーホールで11月19日に行われた。

- ・ 学生作品の制作、発表（通年）
- ・ メディアパフォーマンス作品の制作・発表（通年）
- ・ インターネット上での作品発表（通年）
- ・ 日本映像学会・映像表現研究会 ・ ISMIE2021（12月）
- ・ プロジェクト研究発表会（IAMAS2022展）での展示、公演（2月）
- ・ ICSAF 2021/JSSA先端芸術音楽創作学会研究会での学生発表(3月)
- ・ 日本映像学会中部支部研究会での学生発表（3月）

成果発表：

- 7月7日より

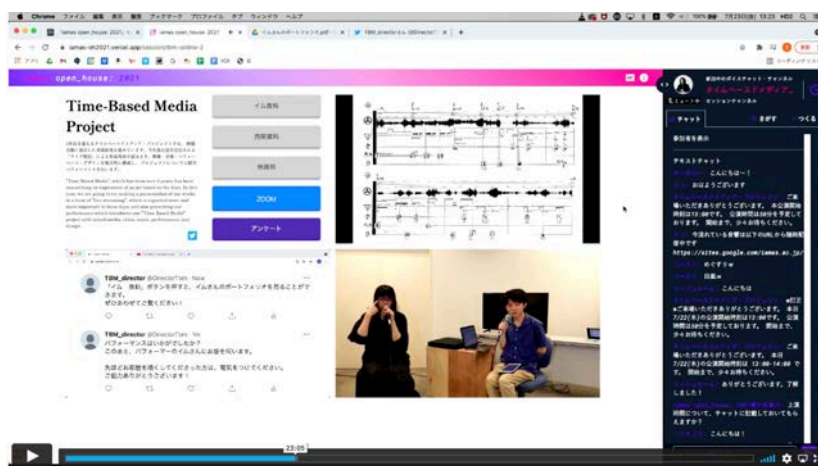
林暢彦によるジェネラティブ・ストーリーミング作品『エコミメシス（梯子）』配信開始

- 7月22、23日 iamas open_house: 2021

タイムベースドメディア・プロジェクト（ライブ配信イベント）

TBMプロジェクトや所属するメンバーの活動をtwitterやzoom、YouTube liveなどさまざまなサービスを利用しながら、IAMASで独自に開発されたプラットフォーム「i.frame」上で発表した。

「今年度のTBMプロジェクトメンバー イム・ヒョンムックによる〈aphasia 失語症 (2010) / Mark Applebaum〉のパフォーマンス、奇しくもオリンピック開会式当日に東京に行ったメンバーとのテレビ電話、ジェネラティブ・ストーリーミング作品の紹介などを盛り込みました。その後、ポータルサイトからzoomに移動したのち、三輪眞弘教授と直接対話ができる構成にしました。」（宮崎那奈子）



i.frameでのライブ配信画面

- 12月9日 イム・ヒョンムック・ピアノリサイタル ライブ配信：
collection of music for Piano, electronic sounds, and video
ピアノ・電子音楽・ビデオのための作品展
日時：2021年12月9日（木）18:30 開演
会場：ソフトピアジャパンセンタービル3階 ギャラリー1



イム・ヒョンムック・ピアノリサイタル ライブ配信

Program :

Orlando Jacinto García – superimposed sonic images (2020)

Jarosław Kapuściński – Juicy (2005/2011)

Jacob ter Veldhuis – The Body of your Dreams (2002/2015)

Toru Takemitsu – Corona (1962)

Nicole Lizé e – Hitchcock Études (2010)

Alexander Schubert – wiki-piano.net (2018)

出演：Hyun-Mook Lim

主催：IAMAS Time-Based Media Project

ピアノ・電子音楽・ビデオのための作品を集めて披露することにより、00年代以前、00年代、10年代、20年代それぞれの制作環境・文化・それぞれ作曲家のスタイルなどを俯瞰し、過去と現在のメディアアートを振り返り見ながら今後のメディアアートの可能性を探る。新たな再解釈をも含め、出来るだけ様々な試みを実践する。

● 12月12 - 26日 インターリンク：学生映像作品展（ISMIE）2021

宮崎那奈子が『岐阜の片隅で記録する試み』（2021）を出品

日本映像学会・映像表現研究会主催「インターリンク：学生映像作品展（ISMIE）2021」がオンラインで開催され、2021年12月12日から26日まで、国内19校から選抜された短編作品が、特設サイトにて公開された。

● 12月21日 - 2022年 3月 6日 IAMAS ARTIST FILE #07 「ウィデオー／からだど情報」オンライン

アーティストトーク：2022年2月23日（水・祝）19:00~20:30

出演：木村悟之 萩原健一 堀井哲史（本展出品作家）

司会：西山恒彦（岐阜県美術館学芸員）

IAMAS ARTIST FILEは、岐阜県美術館とIAMAS が2013年から2019年まで6回に渡って共催した展覧会であり、7回目となる本展では、映像メディアによる表現を展開してきた3名のIAMAS出身のアーティスト 木村悟之、萩原健一、堀井哲史を紹介した。普段よく耳にする電子的な映像を表す「ビデオ」の語源は、ラテン語の「videō（ウィデオー）」であり、それには「私は見る」といった意味がある。映像表現のなかでも「からだど情報」の関係に着目した三人三様の「見る仕事」を展示した。

木村悟之 出品作品：

「軌跡映画1」アーカイブ (2004-2021)

軌跡映画4 (2007)

飛行物体 (2022)

萩原健一 出品作品：

SUGATAMI (2008-2010)

TRAIN (2018-2021)

フレット・アニメーションワークショップ (2020-2021)



堀井哲史 出品作品：

Light and Shadow (2019, 2021)

The exhibit was presented at Daito Manabe × Rhizomatiks Research, Lucid Motion at ARTECHOUSE DC.

ENDLESS IMAGINARY (2021)

Behind the Scenes /Left (2021)

Behind the Scenes /Right (2021)

会場：岐阜県美術館 [展示室2]

企画：岐阜県美術館 (西山恒彦)、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] (前田真二郎)

協力：IAMAS Time-Based Media Project

(アーティストの制作サポート、自動映像展示制御システム制作、デザイン作業他)

● 2022年1月13日 - 2月4日 <サカエチカ クリスタル広場ビジョン>



サカエチカ クリスタル広場ビジョン

LED. 実行委員会 (Leading Educational group for Display research.) による7大学との映像コラボ企画で、稲吉宏紀が《one second》、宮崎那奈子が《習作 2021/9/18-10/8》を出品。

-

- 宮崎那奈子《習作 2021/9/18-10/8》

2021年9月18日 (土) から10月8日 (金) までの21日間、作者がその日「もっとも遠くに来た」と感じた場所で毎日撮影を行った。本作は、そのようにして撮影した映像素材を21秒に編集したものである。映像の使用する部分には、作者が感覚的に選んだカットと機械的に抽出したカットが含まれており、それらの関係を探った。

稲吉宏紀《one second》

私たちの生活の中で至る所で見かける時計という存在。それらは、それぞれが個性を持った異なる形だが、全く同じ時を刻む。私は、毎日、ひとつずつ、プログラミングにより時計を制作した。本作品では、グリッド上にそれらを並べて、1秒毎に時計の配置に変化を与えるアニメーションを施した。私たちが普段、意識しない”1秒”を体感してもらいたい。

● 2月20日 - 23日

プロジェクト成果発表会「未来を拓く タイムベースドメディア」

(IAMAS 2022展) 学生作品/プロジェクトの成果発表

《TBM配信アーカイブ》@シアター (約70分)

7月22、23日の iamas open_house: 2021におけるライブ配信イベントのアーカイブ上映

宮崎 那奈子《岐阜の片隅で記録する試み》@シアター (約25分)

映像眠り記録上映。作者自らが設定したルールに基づいて撮影・編集した作品。作者の故郷・岐阜県のある場所で、計2時間30分の定点観察を実施し、2台のカメラ、レコーダー、筆記用具を用いて記録を行なった。同一の時間や出来事をさまざまな方法で立体的に捉えることを試みた。

Hyun-Mook LIM《co(VID)rona》@セミナーホール (約60分)

演奏電子音楽現代音楽再解釈。1962年に作曲された武満徹と杉浦康平の共作「コロナ」は、一見自由そうに見える一方でできる限り厳格で書かれた指示書が伴う図形楽譜として構成されている。しかしもう1枚、全く自由な解釈ができるページが残されており、その1ページを中心的に触り、ビデオ(VID)や電子音楽といった編成を加わりつつ、新型「コロナ」ウィルス拡散事態に置かれた2022年の現在に立ち、1962年の「コロナ」をどのように読み直せるかについて考察する。

樋口 聡一郎《空気感配信》@ソピアホール/オンライン (約25分)

コロナ禍において劇場や寄席といった「ハコ」での公演の多くはオンラインでの配信に代替され、配信ならではのコンテンツ制作が模索された。ところで、本来の「ハコ」が持っていた「空気感」を配信でも作れるのだろうか。場が暖まる、客の反応を見て演者もエンジンがかかる、演者と客が一体となって場の空気を作る、この化学反応を配信でも再現できないか。

稲吉 宏紀《Interval of Stillness》(展示作品)

時間クリエイティブコーディンググラフィックデザイン。あたかも、時間は私たちの外にある不変の存在のように思える。だとしたら、なぜ、退屈な時ほど時間はゆっくり進むのか、歳を重ねるにつれ時間経過を早く感じるのか。実は、時間は私たち自身に内在していて、人それぞれが全く違う時間を今この瞬間にも生み出し続けている気がしてならない。ふと時計を見上げると、やはり、秒針の先は一定間隔で点を打つだけだった。しかし、一秒ごとに打たれる点の連続を線に補完する行為は、紛れもなく私がしていた。

- 3月5日 日本映像学会中部支部第2回研究会

宮崎那奈子が《岐阜の片隅で記録する試み》(2022) を発表



《岐阜の片隅で記録する試み》宮崎那奈子 (2022)

- 3月5,6日 ICSAF 2021 インターカレッジ・ソニックアーツ・フェスティバル 及び、第47回JSSA先端芸術音楽創作学会研究会

- 林賢黙 (Hyun-Mook LIM) が《co(VID)rona》(即興演奏) を発表。(3/6 コンサート2)
- 電子音響と映像を用いた音楽作品の再解釈について ～武満徹『Corona』(1972)を事例に (研究発表) 林賢黙、三輪真弘 (3/6 第2セッション)
- 他者と共に行う新しい創作形態の試み ～《変容の対象》からの展開～ (研究発表) 福島諭、三輪真弘 (3/6 第2セッション)



co(VID)rona イム・ヒョンムック

その他の成果：

- 3月 データ配信システムの開発

予定実現を目指していたバイト単位のデータをインターネット上で配信する「データ配信システム」がMAX/MSPの拡張オブジェクト「node.script」によって実現可能となり、卒業生の大久保雅基くんの協力を得て、その配信環境が実現した。現在実験的に、今まで Generagive Streaming 作品として公開してきた三輪の作品「神の旋律」をそのまま音高データとして24時間配信し、ユーザーのPC上で動作する専用のMAX8のパッチでそれが「受信」可能となっている。

以上